

自我体験研究への現象学的アプローチ

渡辺恒夫 東邦大学
Tsuneo Watanabe Toho University

要約

自我体験は、最初、現象学者シュピーゲルベルグによって1964年に研究報告が出されたが、現在は日本の心理学者によって現象学的ではない方法で研究されている。本研究は、この体験現象を現象学的に研究するための枠組みを描くことを目的とする。過去の自我体験研究をいかにして現象学的な研究へと読み替え、作り変えていったらよいかの議論を行ったのち、ジオルジ (Giorgi, 2009) の、フッサールの方法を質的研究の系譜に位置づけて修正した方法に学びつつ、まず、6歳にして自我を自覚することで自分が神であることに気付いたという、鮮烈な自我体験事例の現象学的分析を行った。次に、精神医学における現象学的分析と比較するために、自己の自明性の喪失を主訴とする木村 (1973) の統合失調症事例との比較を行った。さらに、自我体験の類縁現象である独我論的体験と、統合失調症および自閉症スペクトラム中の独我論的事例を、現象学的に分析比較した。最後に、レンプ (Rempp, 2005/1992) による発達モデルを参考にし、ブランケンブルグ (Blankenburg, 1978/1971) の言う「統合失調症性エポケー」の考察に基づき、自我体験も独我論的体験も「発達性エポケー」に源泉があるという知見を提起した。現象学的エポケーを企てる哲学者でもなく、精神病理学的エポケーに苦しむ統合失調症や自閉症の患者でもなくとも、「正常」な精神発達過程の途中で、とりわけ児童期に、私たちは、自己の自明性の破れを、つまり自然発生的なエポケーを、経験することがあるのである。

キーワード

自我体験, 現象学, 独我論的体験, 発達性エポケー, 精神病理学的エポケー

Title

Phenomenological Approach to the Study of the "I-am-me" Experience

Abstract

The "I-am-me" experience, which was first investigated by the phenomenologist Spiegelberg (1964), is currently studied by using non-phenomenological methods. I have outlined the phenomenological approach to investigating this phenomenon. First, I have discussed analyzing past research on the I-am-me experience from the phenomenological perspective. Then, I conducted a phenomenological analysis of a typical case of an I-am-me experience based on Giorgi's (2009) modified Husserlian approach and compared it to Kimura's (1973) analysis of a schizophrenia case. I also conducted a similar analysis of a typical case of a "solipsistic experience," once regarded as a type of an I-am-me experience, and compared it to an autistic case. Based on the consideration of the Blankenburg's "schizophrenic epochè", I have proposed the idea that the I-am-me experience and the solipsistic experience may originate from a "developmental epochè". One may experience a disruption of the self-evidence of the self at certain stages of normal personal development, especially in childhood, even though one is neither a philosopher undertaking a phenomenological epochè, nor a patient suffering from a psychopathological epochè.

Key words

"I-am-me" experience, phenomenology, solipsistic experience, developmental epochè, psychopathological epochè

I 序論

1964年のこと。日本でも『精神医学・心理学と現象学』（Spiegelberg, 1993/1972）の著者として知られる哲学者シュピーゲルベルグは、『実存的心理学・精神医学評論』に、「児童期と青年期における“私は私だ”体験（'I-am-me' experience）」（1964）という論文を発表した。

“私は私だ”体験とは、たとえば次のような体験である（以下、引用された事例には、引用元での番号でなく本稿独自の通し番号が付してある）。

事例1 （ハイスクール生徒／女子）

私は私だということに気がついたのは、5歳くらいのある日、何もしないでただ座っている時のことだった。私は、なぜ自分は誰か他の人ではなかったのかと、自問自答を始めた。この疑問はその後一週間ほど続いた。その後も時々浮かんだが、最近はあまり浮かばなくなった。（p.18）

シュピーゲルベルグは、この体験は「哲学でも心理学でも奇妙なことに無視されてきた」（p.4）という。そして、文芸作品中からこの体験と思われるエピソードを紹介して考察したのち、心理学者の協力の下に高校・大学生を対象に「質問紙調査」を行っている。上記の事例1も、そこで得られた調査事例の一つである。

シュピーゲルベルグにとってこの研究の主な目標は、この体験の「存在を経験的に確認し、より完全な心理学的かつ哲学的研究のために活用できるようにすること」（p.3）にあった。そして、「この経験的確認がなされれば、哲学的な解明と解釈が始まる。……謎めいた表現に潜む体験についての注意深い現象学的探求が第一に必要なのである。存在論的形而上学的解釈はそれまで待たねばならない」（p.20）と結論の中で述べている。事実、その後、この研究に基づいて、自己（self）についての哲学的現象学的考察を残している（Spiegelberg, 1986）。

彼が、この論文をもって、「“私は私だ”体験」の存在を経験的に確認したと見なしているか否かは、文面

からははっきり読み取れない。けれども、心理学研究者の目で見ると、体験の見本例を提示して同様の経験があれば自由記述させるという方法は、本格的調査の手前の探索的段階に当たるものである。事例抽出の手続きの記載もなく、抽出のために判定基準が作成された形跡もない。そして、この研究が、現象学的心理学を始めとする質的心理学研究にとってふさわしい材料を提供していると思われるにもかかわらず、この研究を直接継承した経験的研究がなされている形跡は、少なくとも欧米諸国には見当たらない。

ところで、日本では、20世紀末から、「自我体験」についての研究がおこなわれるようになった（西村, 1978; 渡辺・小松, 1999; 天谷, 2002, 2004等）。これに関する現在まで唯一の論文集である渡辺・高石（2004）の編著書を見ると、その冒頭に、「自我体験事例 No.1」として、次のような例が載っている。

事例2 （20歳／女性）

6歳か7歳くらいの頃、ある晴れた日の正午ちょっと前、自宅の2階の部屋にいて、窓から射し込む日差しをぼーっと見ているときに、「私はどうして私なんだろう、私はどうしてここにいるんだろう」と思った（渡辺, 2004, p.3）。

事例1と事例2を比べて直ちに起こる疑問は、両者は同じ種類の体験ではないかということだろう。ところが、両者には異なる名称がついている。その理由は、日本産の自我体験研究が、ビューラー（Bühler, 1969/1926）によって青年心理学に持ち込まれた“*Ich-Erlebnis*”（英訳は“*Ego-experience*”または“*I-experience*”）という概念を出発点にしているからに他ならない（西村, 1978, 2004）。奇妙なことにシュピーゲルベルグの方では、ビューラーへの言及が全くない。そして日本の自我体験研究者も、つい最近までシュピーゲルベルグの研究を知らなかったというのである（渡辺, 2009, 参照）。

筆者は、日本におけるこれまでの自我体験研究を検討して、シュピーゲルベルグが本来めざしていた方向へと、つまり現象学的研究として発展させるのが、自我体験研究の将来の可能性を拓くのではないかと考えるにいたった。自我体験研究を発達心理学の側から検

討した高井(2004)は、発達心理学の主流のパラダイムである実証的・客観的方法にとって自我体験がとらえにくい理由をいくつか挙げている。本稿のテーマに関連してまとめれば、自我体験は、(1)主観的個人的なものであって回顧的にしか把握されず客観的に生起の現場をとらえることができない、(2)誰でも体験するのではなく少数派の体験であって普遍性に乏しい、ということになる。逆にいえば、自我体験のこのような特徴こそは、現象学的接近にふさわしいのではないだろうか。(1)に関していえば、現象学は個人の主観的体験も学問研究の対象になり得るところから出発する学であって²⁾、後述するように(Ⅲ節)、主観的体験から出発して普遍性を目指すための方法論的試みがされている。(2)に関して、これも後述するように(Ⅳ～Ⅴ節)、少数者の体験である精神病理学的体験の考察を通じて普遍的な体験構造を照らし出す試みが、現象学的精神医学とその周辺領域でなされているのである。にもかかわらず、従来の自我体験研究において現象学への言及が無く、僅かに、ブランケンブルグ(Blankenburg, V. W.)や木村敏の現象学的精神医学における「自明性」概念が、渡辺(2008, 2009)によって自我体験の記述的現象的定義に取り入れられているだけなのは、理解しがたい。

本稿は、自我体験でなく自我体験研究への現象学的アプローチと題したように、自我体験への直接の現象学的な質的記述的研究を主眼としたものではなく、どのように現象学的方法を用いるか、それによってどのような知見が得られる可能性があるかについて考察しつつ、自我体験研究を現象学的研究として展開させるためのアウトラインを描き出した、理論的性格の論文である(従って、具体的な事例提示も、そのため必要な場合にとどめた)。まず、シュピーゲルベルグにおける自我体験研究と現象学との関係をⅡ節で一瞥したのち、Ⅲ節では、ジオルジ(Giorgi, 2009)の記述的現象学の方法と、現行の自我体験研究を照合することで、その現象学的展開への見通しを描き出す。Ⅳ節では、シュピーゲルベルグが考察の出発点とした「事例エミリー」について、「自己の自明性」を枠組みとし、ジオルジの分析方法を参考にして現象学的に解明を試みると共に、統合失調症と自閉症の事例について自我体験および「独我論的体験」との統合的理解を図る。Ⅴ

節ではさらに、レンプとブロートンの発達モデルを参考に、発達の視野をひらく。Ⅵ節では、発達性エポケーという概念によって自我体験・独我論的体験を捉え直し、哲学的現象学的エポケー、統合失調症や自閉症における精神病理的なエポケーとの関連の中に位置づけを試みる。なお、「独我論的体験」とは、初め、自我体験の一種と見なされていたが(渡辺・小松, 1999)、のち、一部の論者によって独立の体験と見なされ(渡辺・金沢, 2005)、さらに、自我体験と一体的に理解されるにいたった体験である(渡辺, 2008)。現象学的精神医学との接続において中心となるため、しばしば自我体験・独我論的体験と併記した。ただし、「自我体験研究」でもって、独我論的体験に関する研究をも含めるものとする。また、簡便さのため、シュピーゲルベルグの'I-am-me' experiencesをも、「私は私だ」体験ではなく「自我体験」と訳すことにする。

Ⅱ シュピーゲルベルグにおける 自我体験研究と現象学

本節では、シュピーゲルベルグが自我体験研究によって現象学的にどのような知見を得たかを瞥見する。現象学的考察を本格的に始める前にこのような節を置いたのは、自我体験の現象学的な質的記述的研究が自己目的化してしまわないよう、現象学的接近がいかなる知見をもたらすか予め見通しを立てておきたいからであり、そのために唯一の先行者であるシュピーゲルベルグにヒントがあるのではないかと考えたのである。

とはいえ、彼の1964年論文自体は、体験事例の考察に当たって現象学的方法を展開させたとは言い難い。質的研究一般としてさえも方法論的自覚を踏まえているとはいえ、前述したように、心理学的研究としては探索的調査の段階にとどまっているのである。理由は、一つには、実証主義全盛の時代に質的研究に習熟した心理学者の協力を得ることが困難であったという時代的制約が挙げられるが、もう一つは、哲学者としては自我体験の現象学的哲学的考察こそ目的であって、経験科学的な方法論は主要な関心事ではなかったからと、推察できるのである。

そこで、彼のその後の哲学的著作に目を向けることにする。中で「自我への現象学的接近」と題する論考 (Spiegelberg, 1986, pp.49-64) には、自我体験を念頭に置いた次のような記述が見られる——「日常経験の水準において現れる自我と、より普通でないもしくは“特権的”状況で経験される自我との間には、我々の哲学的心理学的な理論考察の中では通常無視されている相違が存在する。前者は日常的な自我現象であり、後者は非日常的な自我現象である」(p.53)。

引き続き諸節の中では、日常的な自我と非日常的な、すなわち自我体験における自我とが、次のように対照されている。まず、「日常的自我の特徴を検討する場合、私は、その『幅と厚み』(volume)とここで名付けておく特徴に注意を向ける」(p.54)。すなわち、日常的自我の現象にあっては、私たちは、自己を、時と場合に応じて、身体やその一部である脳髓や、さらには自己の属する共同体、社会的役割、来歴と同一視するのである。つまり、日常的自我には時間的空間的意味的な幅と厚みがある。他方、非日常的な自我現象についてはどうか——

多くの子どもたちと思春期の少年少女が、「私は私だ」という、同語反復的に響く言明で表現される突然の体験に襲われる。そして、彼らの多くが、「なぜ私は私なのか (Why am I me?)」という疑問に悩まされる。……すくなくとも我々のある者にとって、この、時空と歴史の中の特定の点への受肉 (incarnation) は、特有の眩暈の感覚をもたらす、と私は考える。このような体験の中で捉えられた自我は、もはや、「自我というもの (the ego)」という普通名詞で表され得るのではなく、語の最も強い意味で個人的にして本来的な、内奥の私そのもの (I-myself) なのである。……このことを自覚することで、人は、おのれの通常の自信ある自我の足元に、深淵を見ることがありえよう。(pp.57-58)

説明を補足すれば、「時空と歴史の中の特定の点への受肉」と言っているのは、事例1での「なぜ自分は誰か他の人ではなかったのか」という問い、事例2での「私はどうしてここにいるんだろう」という問いを参照すれば意味がよく分かるだろう。自分がその人でありえた他の誰かが無数に存在しているはずの時空と

歴史の中のただ一点が——つまりたったひとりが——なぜか自分である、という事態への気づきが眩暈をもたらす、というのである。

この論考を含む著作や他の著作の中でも、シュピーゲルベルグは、自我体験を踏まえていくつかの哲学的倫理的な考察を展開している。中でヒントとなるのは、「自己を他者へ移入すること」(1986, pp.99-104)と、「代理的経験を通じての現象学」(Spiegelberg, 1975, pp.32-53)という論考である。ここでは、共感・感情移入や同情などあらゆる種類の人間関係の基礎となっている現象が現象学的に考察され、その核心が「自己を他者へ移入する」ということ、すなわち、他の人間であるという事態の想像 (想像的自己転置) にあるとされるのである。「想像的自己転置は研究者が自分自身を、その他者が現に存在している場所に存在していると想像することを、そして、その場所から世界をこの新たな遠近法の中で与えられている通りを見ることを、要求する」(p.48)。しかもこの独特の想像が純粹になされるためには、自己のいかなる「幅と厚み」、いかなる経験的属性も持ち込んではならない。少しでも自己の経験的属性をもちこんだら、移入先の他者は他者ではなく私であることになってしまうからである。したがって、純粹な自己移入、想像的自己転置とは、「われわれの経験的属性がすべて括弧入れされ、相対化され、もしくは中立化される、一種の現象学的還元と呼べるかもしれない」(Spiegelberg, 1986, p.102)。この点で、それは、同感 (sympathy)、感情移入 (empathy)、同一化、役割取得などは区別されねばならない (p.103)。

ここで、自我体験と純粹な想像的自己転置の共通点が明らかになる。自我体験にあっても、「なぜ私は私であって他の誰かではないのか」と訝る私は、時空の特定の点へ受肉した非日常的自我として理解されていて、いかなる「幅と厚み」もないのである。想像的自己転置が一種の現象学的還元であるというならば、この論考の中では明示的に示されていないが、自我体験も一種の自然発生的な現象学的還元と言えるのではないだろうか。精神病理学的体験の考察へと接続する上で、この知見は重要である。本稿後半で見られるように、現象学的精神医学でもまた、統合失調症や自閉症のある症状を、一種の自然発生的な現象学的還元とする見

方が打ち出されているからである。

かくして、シュピーゲルベルグについての考察は、自我体験を自然発生的な現象学的還元と見なすことの可能性を示唆するにいたった。これは、現象学的に考察された精神病理学的な体験のみならず、哲学的な現象学的還元との比較考察への、動機づけとなる知見というべきだろう。

III ジオルジの現象学的心理学と自我体験研究

この節では、心理学研究法としての現象学的方法を取り上げ、それと現行の自我体験研究とを照合することで、その現象学的展開への見通しを描き出す。自我体験研究としては、前述の渡辺・高石(2004)のほか、自明性概念を導入している渡辺(2008, 2009)の研究を、「現象学一歩手前」と見なして中心的に取り上げる。

心理学研究法としての現象的方法といっても多様であるが、ここではジョルジの、『心理学における記述的現象学の方法』(Giorgi, 2009)を取り上げる。理由は、①「フッサールのアプローチ」という副題が示すように、本家現象学ともいべきフッサールの超越論的現象学から出発しつつ、それを経験的心理学の方法へと作り変えるための方法論的試みがなされ、しかも、具体的な方法の叙述に入る前に質的心理学の歴史的概観の章が置かれるなど、現象学的方法が質的心理学の系譜に自覚的に位置づけられていること。②人間科学への現象学の展開には、現存在分析(Binswanger, 1960-1961/1957)の昔から、最近の日本での試みにいたるまで(たとえば、鯨岡, 2005; 佐久川, 2009)、臨床場面を想定したものが多いのに対し、記憶研究という一般心理学的研究テーマを想定した研究枠組みであること。日本の自我体験研究にも臨床家が参加しているが、自我体験研究自体は臨床場面よりも調査での収集テキストが主要なデータベースになっているという意味で、一般心理学的研究枠組みの中にある。③方法論的探求の中で、後述するようにシュピーゲルベルグが参照されていること。そして、①②③を総合するならば、④シュピーゲルベルグがもっと長生きし、質

的心理学の興隆に促されて自我体験の本格的な経験心理学的研究を行おうと決心し、そのため哲学としての現象学を経験科学へと作り変えようとしたと仮に想像して、その場合に書いだろう本に、ジョルジのこの本は最も近いと思われるのである。

次に、ジョルジの方法の核心を、本稿での関心に相關する限りにおいて——西條(2005)の用語を借りるならば「関心相關的」に——極めて単純化して示す。

- ①他者が体験した経験を記述したテキストを、データとして収集する。この場合、当の他者が自ら記述したか否かは問わない。重要な点は、テキストが、他者の行動や特性ではなく、他者自らの体験を記述したものになっていることである。
- ②収集されたテキスト・データを、現象学的還元の状態でもって読む。
- ③複数のテキストを比較照合することを通じ、テキストが描写する体験の本質的構造を明確化する。

①であるが、自分についてではなく他者についてのデータを基に研究することは、ジョルジ(2009)も言うように「科学的研究の伝統」(p.112)であって、ことさら取り上げることでないように見える。けれども、現象学的には躓きの石となる。なぜなら、「分析者の意識に現前したもののみが[現象学的に]分析できるのに対し、これらの経験は他者に生じているからである」(p.96, []内引用者註)。どのようにして、直接接近できない他者の意識経験を現象学的に分析できるのだろうか。ここで、ジョルジが訴えるのが、すでに述べたシュピーゲルベルグの「想像的自己転置」である。すなわち、体験事例を提供している当の他者であると自分を想像し、その人間へと転置された自分自身の体験として、体験を分析するのである(p.97)。

このような他者の経験への接近法は、自我体験研究にも見られるところである。渡辺(2008)は、自我体験の問いとは、他の人称に変換不可能な問いであるとして、他者の経験を叙述したテキストに対する「一人称的読み」を提唱する。

たとえば、アメリカのブッシュ大統領が「なぜジョージ・ブッシュが私なのか」という自我体験の

問いを発したとして、ブッシュ大統領が他人だからといって「なぜジョージ・ブッシュが彼なのか」という文には変換できない。意味がまったく違ってしまい、なによりも無意味にしか感じられないだろう。自我体験とは、自分自身の問いとして体験し直すことが、有意味性の条件となるような体験なのである (p.140)。

ただし、渡辺は、一人称的読みの貫徹のため、自我体験事例テキスト中の固有名詞を研究者自身の名に置き換えて読む読み方を要求するが、それでは問題が生じるだろう。たとえば上の例の文がより詳しいテキストの一部であった場合、「ジョージ・ブッシュ」を研究者自身の姓名に置き換えることで、年齢・性別・背景などが大幅に違ってきてしまうと、様々な矛盾が生じてテキスト全体の理解を妨げることもありうるからである。やはり、想像的自己転置に忠実に、自分が第43代米国大統領であると想像すべきだろう。

②についてであるが、ジオルジ (2009) は、「現象学的還元を執ることなしには、いかなる分析も現象学的といえない」(p.98) という。想像的自己転置に基づくテキストの読みが、一種の現象学的還元であることは、すでに述べたとおりである。けれども、ここでジオルジの要求していることは、「この還元によって、経験の対象が(現前する現象へと)還元される」(p.98) という、極めてオーソドックスな種類の現象学的還元である。この現象学的還元は、独我論的体験を扱う場合に特に重要になるとと思われる。

事例3 独我論的体験事例 (高石, 2003)

私は小学校に入る前ぐらいからずっと、自分以外の人は家族も友だちもみんなロボットで、私だけが人間なんだと思い込んでいました。みんなが私を監視していて、バスとかも私が見ている時だけ走っているけどそれ以外の時は動いてないんだと思っていました。この不信感はすごく根強くて、小学校の中学年か高学年ぐらいまでぬぐえなかったと思います。はっきりとおぼえてないけれど、多分親友と思える友だちができた頃からそういう妄想がなくなった気がします。

独我論的体験について、渡辺 (2008) は、「独我論的体験が、これまで散発的に報告されることがあった

にもかかわらず、テーマ化されることがなかったのは、報告者が、独我論的体験を一人称的に再体験しようと努めることを怠ったため、体験に含まれている主張内容それ自体が間違いであり従って異常であるとする前提に立ってしまい、発達段階上の退行や病理といった領域へと『異領域化』してきたからと思われる」(pp.141-142) と評している。この事例の体験も、他者の体験として扱う限り、体験者から見て「他者」である研究者自身は自分がロボットではないことを知っているのだから、必然的に誤謬と判断されてしまう。ここで、「一人称的に再体験しようと努める」とは、現象学的アプローチからは、「想像的自己転置により、他者の体験記述を自己の体験記述として、現象学的還元の状態をもって読む」ということになるだろう。それによって、「体験に含まれている主張内容自体が誤謬」という帰結は避けられる。「周りの人達は人間」という常識的客観的な世界もまた、真偽以前の「現象」へ還元されるからである。

③の「本質的構造の明確化」を、ジオルジ (2009) は、現象学的哲学における、自由な想像的変容による本質観取に比する。ただし、本質 (essence) という概念は経験科学にはなじまないため、質的心理学の方法としての現象学では、「具体的な諸経験の構造を、その構造に固有な高次の形相的不変項としての意味によって分析する」(p.100) という方法をもってこれに替えるとする。このジオルジの文章は、「形相的」などという、まさに経験科学になじまない語が使われたりしてかえって分かりにくいので、以下に、自我体験研究とジオルジの方法とを対応させつつパラフレーズすることにする。

(a) まず、想像的変容による本質観取という哲学的方法に対応する質的心理学的方法の第一歩は、体験事例テキストをできれば複数個収集することである。これが、ジオルジの言う分析データとしての「具体的な諸経験」(強調点引用者) の収集に当たるだろう。

(b) 次に、収集された事例の内的体験構造を描きだす。これで、彼の言う「具体的な諸経験の構造」(同上) まで来たわけである。(c) 他方で、自我体験・独我論的体験に固有な記述的現象的特徴を抽出する。これが「高次の形相的不変項としての意味」の抽出に当たる。(d) 最後に、これらの現象的特徴と内的構

表1 自我体験 独我論的体験判定基準

小松 (2004) を基に作成した。

<p>自我体験判定基準：①を必須条件とし、さらに、②、③、⑤のうち1つ以上の基準を満たしていること。</p> <p>独我論的判定基準：①と④の双方を満たしていること。</p>
<p>①自己が何らかの形で主題となっていること。</p> <p>②突発性 普段の生活とは連続しない特殊なエピソードとして回顧されていること。具体的には「ふと」「突然」「瞬間」などの表現によって、その体験が生じたときの「唐突さ」や「脈絡のなさ」が記述されていること。</p> <p>③違和感 何か理解しがたいことが生じている、あるいは、その体験が普通でない、という独特の感じが伴うこと。</p> <p>④孤立と隔絶 自分という存在が、全ての他者、さらには世界全体と対置され、自己の孤立性や例外性が強く意識されていること。</p> <p>⑤自己の分離 自分という存在が2つに分離して感じられたり考えられたりしていること（なおこの基準の適用に際しては、それまでの自己の自明性に対する違和や懷疑が認められるかどうかをチェックした）。</p>

造とを対応づけることによって、自我体験・独我論的体験に固有な内的構造を明らかにする。これで、「構造に固有な高次の形相的不変項としての意味によって分析」したと言えるのではないだろうか。

実際に、自我体験研究現場で、この過程に当たるものを探してみよう。

(a) に関しては、この研究の中で多数の体験事例テキストが収集されていることは①ですすでに確認したことなので、ここでは繰り返さない。

順序が逆になるが (c) の体験固有の記述的現象的特徴の抽出について、先に見てゆく。この抽出過程について渡辺 (2009) に従って見てゆくと、自我体験の暗黙の定義と、多数のテキスト事例の間から自我体験を判別する判定基準の間の、「解釈学的循環」を経て「自己の自明性の破れ」という記述的現象的定義に達する、という構造であることが分かる。解釈学的循環とは、判定基準を作るためには自我体験とは何かがあらかじめ分かっている必要はなく、暗黙にせよ定義がなくてはならないが、定義が形成されるためには定義のもとになる体験事例がすでに収集されていなければならない、暗黙にせよ判定基準がそこに働いていなければならない、という事態のことである (p.93)。判定基準の例を表1に掲げる。判定基準は、研究の妥当性の保証のために特に重要である。

このような、暗黙の定義と判定基準との解釈学的循環の結果、ブランケンブルグ (1978/1971)、木村 (1973) の「自明性」(Selbstverständlichkeit) 概念を導入して形成されるのが、次の「記述的現象的定義」である (渡辺, 2008, 2009)。

自我体験：個別的同一的存在としての自己の自明性の破れ。

独我論的体験：類的存在としての自己の自明性の破れ。

これで、「自我体験・独我論的体験に固有な現象学的特徴を抽出する」ところまで来たわけである。

(b) にもどるならば、渡辺 (2009) が構造図解的方法と称している方法に、手掛かりがあるので引用する。

体験事例の意味的構造連関の明示化のため図解を多用した……。図解は補助手段というより、体験世界の構造理解のために必須の方法とみなされる。……図面において平屋と二階建ての違いが、「類型」の違いとして図解されるように、図解は個別事例の個別的理解を超えて、「類型」としてより普遍的な理解をもたらす。……図解によって、二階建ては個別事例を超え、たった一例であっても二階建てという類型の意味を、より容易に獲得できるのである (p.23)。

このような構造図解法によると、まず自我体験に共通の特徴は、「私が他の自己たちの間の一つの自己として存在するという常識的日常性の世界と、私がその唯一の中心として、唯一の自己として存在する主観的経験世界という、二つの世界の間の矛盾の意識」(p.178. 傍点引用者)として図解され、理解されることになる。次に、渡辺は、一見して判別のつきにくい自我体験例と独我論的体験例について、やはり構造図解法を用い、「自己と他者の間の二重点線の有無」による区別を行っている(pp.191-194)。二重点線とは、「類的関係」を示すもので、自我体験の場合、他者の自明性が疑問視されているわけではないので、私と他者の間に「二重点線」を引くことができる。ところが独我論的体験の場合、二重点線は、「私に見られる存在である『他者たち』相互間に移行してしまい、私には仲間がない(=類例がない)状態にある」(スペースの都合でここでの図の引用は省略するが、後に出てくる表2では、「世界の二重化」と「自他を結ぶ二重点線」の実例が示してあるので参照されたい)。

ここまでくれば、(d)は容易に理解できる。「個別的同一的存在としての自己の自明性の破れ」という自我体験の記述的現象的特徴と、世界の二重性というその構造的特徴が、まず対応付けられる。自己が相矛盾する2つの世界に同時に属することが、自己の自明性の破れとして体験されるわけである。次に、「類的存在としての自己の自明性の破れ」という独我論的体験の特徴は、私と他者の間の「二重点線」の不在という構造的特徴と、対応付けられることになるのである。

IV 自我体験 独我論的体験と病理的体験の現象学的分析

以上、III節においては、自我体験研究の中では、現象学を謳ってこそいないがそれに相当する方法が用いられていることが、ジョルジの記述的現象学の方法に照らして示された。このことは、I節(p.118)で指摘した現象学的研究の2つの利点中、(1)として挙げた「主観的体験から出発して普遍妥当性を目指すための方法論的試みがなされている」ことが、すでに自我

体験研究の中である程度実現していることを示している。そこで、本節からは、(2)として挙げた、「少数者の体験である精神病理学的体験の考察を通じて普遍的な体験構造を照らし出す試み」に進むことになる。すなわち、共に少数者の体験である、自我体験・独我論体験と精神病理的体験を、現象学的に比較考察し、体験をより普遍的な光で照らし出す試みに進む。この試みには2つの課題が含まれる。

- A これら両者の間の現象学的な共通項は何か、また相違点は何か。
- B 一方を病理的のみなし他方をそうでないとする、現象学的根拠は何か。

Aの問いに取り組むために、すでに前節で紹介された、ブランケンブルグと木村の「自明性」の概念を手掛かりとする。自明性の何らかの破れこそが、自我体験・独我論体験と精神病理的体験との、共通項と見なされたことによって、記述的現象的定義が成立しているからである。本節では、自己の問題へとより焦点づけられている木村の議論を取り上げる。ただし、病理的エポケー(統合失調症性のエポケー)という観点を打ち出しているのはブランケンブルグの方なので、彼については後の節で取り上げることにする。

木村敏における自明性の概念

木村が自己の自明性について最初に、かつ最も詳しく論じているのは、『異常の構造』(1973)である。それによると、常識的日常世界はあまりにも自明であるので、その構造を問うことは、統合失調症者の「妄想」的な体験世界を通じてしか可能とならない。こうして具体的な症例を検討して明らかにされた自明なる常識的日常世界の構造は、以下の3つの「原理」で表わされる。

①個物の個別性：それぞれのものが一つしかない、ということ。このことは、形をもったものについてだけでなく、「自分」についてもいえる。「常識的日常性においては、私自身は私以外のだれかの自分とは絶対的に別の自分であって、うっかりしてとり違えたり、間違っって入れ替わったりするようなことは絶対に起こりえない。／ところが、この個物の個別性の原理は、前章の症例の患者においてはまったくその効力

を失っている。この患者においては『Oさんて二人いるんです。一人であって二人ということなんです。……一つが二つで二つが一つ……私がOさんになってOさんが私になって』ということになる」(pp.110-111)。

②**個物の同一性**：それぞれのものは、いついかなる時でも、いかなる場所におかれても、それ自身であることには変わりはなく、別のものになることはないということ。自分ということについても、同じことがいえる。「今日の私が昨日は私でなかったとか、明日はもはや私でなく別の人になっているとかいうことはどうも考えられない。自分はいついかなる場所にあってもつねに同一の自分である」(p.112)ただし、自分の身体も性質も成長老化につれて少しずつ変わっているので、個物の同一性とは、第一の原理として挙げた個物の個性が同一性を保っている、という意味に解しなければならない。「したがって、前述の患者において個物の個性が成り立っていない以上、その同一性もまったく問題になりえなくなっていることは、いわば当然の帰結である。患者は『私がOさんになってOさんが私になって……どうして違ってくるのか……変更って言うこと』」(p.114)と言うのである。また、別のところでは、症例提示こそないが、「自分がもともとの自分とは別の人間になってしまったとか、自分が一人ではなく多くの分身にわかれているとか、自分が時間的な連続性をもたず、毎晩眼をさますごとに別の自分になっているとかの、自己同一性の障害を訴えることも多い」(p.52)と述べられている。

③**世界の単一性**：私が現在ここにいるこの世界は、私以外のだれもがやはりその中にいるところの世界である。私たちはすべて同じ一つの世界の中にいる。私がこの世界にいて、それとは別の世界の中にいる人となんらかの関わりをもったり話をかわしたりするというようなことはありえない。ところが、「私たちの患者においては、この原理もやはり深刻な危機に直面している。彼女は『なにもかも二重になって、世界が二重になって、表の世界と裏の世界と……私自身も二重になって、二人いるみたい』という。……患者のいつているのは、むしろ世界の単一性がどうあれ、いかなる世界にせよそこへ置き入れられるべき自己の単一性が成立していないということである」(pp.117-118)

以上の原理を検討した結果、木村は、自明なる常識的日常性の世界公式を $A=A$ の同一律で表し、哲学者フィヒテの言葉を借りて、 $A=A$ が成立するためには、「私が私である」ことが絶対に必要だということ。ここから木村は、統合失調症者が統合失調症者であるかぎり、そこに必ず見出される事態とは、「一言でいえば自己同一性についての自明性の喪失である」(p.121)という命題を導き出す。

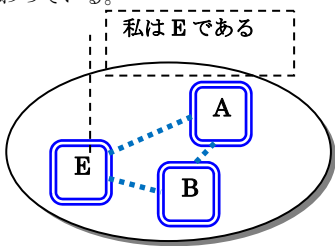
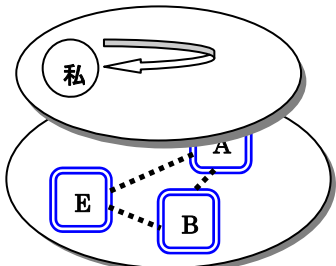
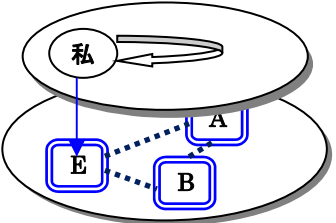
この木村の考察の中には、独我論的体験への言及は見当たらないように見える。けれども、後年、木村が『異常の構造』の論点を簡潔かつ発展的にまとめた欧語論文 (Kimura, 1997) では、次のようなくだりを目にすることができる。「統合失調症の本質的症状についての私の仮説は、それゆえ、……個としての存在と類の一員としての存在との間の根源的な乖離を想定するところにある」(p.348)。これはまさに、前節で見た独我論的体験の記述的定義「類的存在としての自己の自明性の破れ」に、正確に照応する一節であろう。

自我にめざめることで自分が神であることに めざめた事例エミリー

以上の、木村の自明性を巡る議論をもって、統合失調症に関する木村の現象学的分析の、結果と見なすことにしよう。次にこの議論を比較のための準拠枠として、自我体験・独我論的体験の現象学的解明に移ろう。

数ある体験事例の中から、何を比較のための代表事例として選び出すべきだろうか。現象学的研究では、代表事例とは「平均的事例」のことではない。ブランケンブルグ (1978/1971) は自然な自明性の喪失についてアンネ症例を専ら考察し、木村もまた前述のように「前章の症例の患者」というただ1例 (21歳女性) によって、自己同一性についての自明性の喪失を論じている。ただし、事例選択における恣意性問題 (西條, 2005) に応えるためには、選択の基準を明示しなければならない。ブランケンブルグは1例提示の意義を考察し、事例選択の基準を次の4条件にまとめている。①求められている基底的变化の全貌が前景に出ていること。②患者自身の陳述から本質的構造契機を引き出せるほどに、緻密で内容豊かな自己表現のあること。③外部的知識や医師の側の関心に影響されて

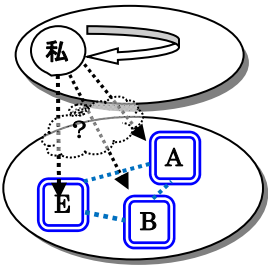
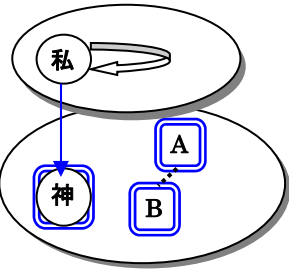
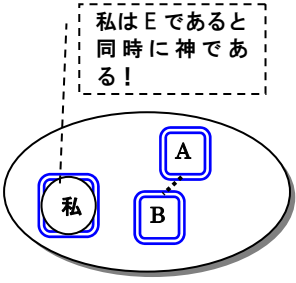
表2 「事例エミリー」の現象学的分析

<p>原テキスト (Hughes, 1929/ 2003, 訳書 pp.119-123)。意味上の単位として (1) ~ (6) と区切って番号をふった。</p>	<p>「 」内は体験としての一人称文。下線の番号は、対応する体験判定基準 (表 1) での番号を示す。</p>	<p>構造図解法による内的体験構造とその解説。E とあるのは Emily の略。A, B は他の人間たちを、その間の 2 重点線は、印刷上太い一重線にしか見えないが、「類的関係」を表す。</p>
<p>(1) 彼女は船首のすみにある揚錨機のかげで……、ままごとをしていた。やがてそれにも飽きて、ややぼんやりと船尾の方へ向って歩いて行きながら、</p>	<p>(1) アダムがアダムであり (A=A) ベッキィがベッキィである (B=B) のが自明のように、エミリーがエミリーである (E=E) のは自明である。かつ、自分がエミリーである (私=E) ことも自明である。</p>	<p>(1) 常識的日常性の世界。A=A, B=B 等と共に、E=E が成り立っている。名を訊かれて「私は E である」と答えることのできる自己意識は備わっている。</p> 
<p>(2) 何となく蜜蜂と仙女王のことを考えていると、そのときとつぜん、自分はたしかに自分だということが、心にひらめいたのであった。／彼女はその場に釘づけになったまま、目のとどくかぎり自分の身体を見まわした。</p>	<p>(2) 「そのとき突然^②、私は私だ、ということが、心にひらめいた」。自我体験。従来、青年心理学で、自我のめざめと呼ばれてきた現象に相当する。下線の番号^②は表 1 での基準^②に対応する。以下同様。</p>	<p>(2) 私=私の自同律 (自己回帰的矢印で表現) の出現と共に、内的世界が成立する。</p> 
<p>(3) ……彼女は両手の皮膚をたんねんにしらべてみた。これも自分のものだから。……／こんどこそ自分はエミリー・パス=ゾーントンだ (… …), というこの驚くべき事実を確信できた彼女は、真剣にその意味を考えはじめた。</p>	<p>(3) 「こんどこそ自分はエミリーだ、という驚くべき事実^③を私は確信した」。従来まで、自我体験として上欄 (2) の現象と混同されてきたが、右図のように、二重化した世界間の関係性がテーマになっている。</p>	<p>(3) 私=E という自明だった事実が、新たな驚きをもって再発見される。</p> 

いないという意味で、信頼のおける陳述であること。
 ④ 大多数の症例で明示的に観取されていないものを明示的に取り出すための症例選択なので、日常の臨床的経験の全てを投入しなければならない (p.53f)。
 これらの基準を充たすような事例は、分量的にも短くて断片的になりがちな調査事例よりも、文芸作品や

自伝に現れる「自発的事例」の中に見られる (渡辺, 2009 は、自発的事例の特徴として、表現の豊かさや調査者の影響を受けない信頼性を挙げ、構造図解法の方法として 20 の自発例を用いている)。本稿では、シュピーゲルベルグ (1964) に文芸作品から引用されている 3 つの自発的事例の中で、質量ともぬきんでて

表 2 続き

<p>(4) 第一に、世界中のどんな人間にでもなれたかも知れないのに、自分を特にこの人間、エミリーにするようにしたのは、どういう力なのだろうか？無限の時のなかで特定の年に生まれるようにし、……てくれた力は何なのだろうか？自分が自分をえらんだのだろうか、それとも神のしわざなのだろうか。</p>	<p>(4) 自我体験の問い：「無限の時の中の世界中の無数の人間のうち、なぜ^①、特定の年に生まれたこのエミリーが私なのか？^②」世界の二重化のため、「私＝エミリー」の等式が自明でなくなり、哲学上「意識の超難問」（三浦，2002）として知られている問いが生じる。</p>	<p>(4) 私＝E の再発見によって、なぜ私は A か B でなかったのかという疑問が起こる。</p> 
<p>(5) ここまで考えると、また新しい問題がでてきた。神とは誰なのだろうか？……ひょっとすると、あたし自身が神ではないのか？しかし、思い出そうとすればするほど、それは逃げて行ってしまうのだった……／……彼女は、とつぜん、恐怖に打たれた。知っている人はいるのだろうか（つまり、彼女がエミリーという特定の人間であって——それどころか、もしかして神で——ただの、どこにでもいる少女ではないということを知っている人が）？……どんなことがあっても、この事実は隠しておかなければならない。</p>	<p>(5) 自我体験の問いへの独我論体験的な答え：「私がエミリーとして生まれた理由は、エミリーが、ただの、どこにでもいる少女ではなく、神に選ばれた特別な存在^③だからだ。否、類例なき特別な存在といえ、神しかない。それゆえ、エミリーこそ神かもしれない」 独我論的体験と判定されるのは、自己が、右図のように類例なき存在として、他の人間と比較されているからである。</p>	<p>(5) 私が A でも B でもなく E である理由が、E の類例なき特別さ（＝神であること）によって答えられる。E が神である事態が、内円を付け加えることで表現されている。類的存在としての自己の自明性はもはや成り立たない。</p> 
<p>(6) ……／しかし、もし自分が神だったとしたら、水夫たちをみんな白ねずみに変えてしまったり、……誰かの怪我をなおしてやったり、こういうことを、神として実行すればいいではないか？……もちろん不安もあった（たとえば、やりそこなうこと、奇跡を起こしそこなうこともある）。……今のところは、神は袖の下にかくしておくほうが安全なのだった。</p>	<p>(6) 「化身教義」の成立。イエスは、人間であると同時に、無時間的な神がただ一回限り時間的世界の中に顕現した化身である。そのように、エミリーは、どこにでもいる少女の一人（＝類的存在）であると同時に、唯一の私でもあるという類例なきあり方をしているので、イエス同様、神の化身であり、イエスのように奇跡を起こすこともできるに違いない。</p>	<p>(6) 内的世界における「私」が「神」として、常識的日常生活の中の内円へと回収されたため、世界の単一性が回復した。</p> 

いる「事例エミリー」を取り上げる。英国の作家リチャード・ヒューズ (Hughes, 2003/1929) の小説の中で、9 歳の少女エミリーの体験として描写されるこの事例

は、①自発的事例の中で最長であるだけではない。②シュピーゲルベルグ (1964) が作者ヒューズに手紙で問い合わせ、この体験が作者自身の 6 歳の頃の実体験

であるという証言を得たという、自発例として例外的に事後チェックがなされていること。③シュピーゲルベルグ以前に、フロム (Fromm, 1956/1941) とサルトル (Sartre, 1952/1947) もこの事例を論じるなど、内容の豊かさと表現の鮮烈さは諸家の関心を引いていること。④自我体験から独我論的体験への発達の構造連関を明確に示し得る唯一の自発例であること。以上の条件を備えた得がたい事例である (それゆえ、以下の分析も、単に病理的体験との比較目的を超えて、質的心理学研究としての現象学的分析の叩き台的見本例とすべく、本稿中最大の紙幅を割いた)。

以下の分析では、ジオルジ (2009, p.146ff) の方法にならって、左欄に原テキストを意味単位に区切って示し、右欄に現象学的分析の結果を示すという3段階構成の表として示した。ただし、ここで右欄に入るのは、本質的構造の明確化としてなされた、内的体験の構造図解とその解説である。中欄は、自我体験・独我論的体験であることが明確になるように、一人称的に書き換えたテキストと、その補足的解説である (解説文は本来、欄外に出すのが望ましいが、スペースの節約と分かりやすさのため、欄内に入れた)。ジオルジは、一人称テキストの場合、中欄では三人称文に書き換えるよう勧めている。研究者とテキスト作者との同一化を避けるためという (pp.153-154)。けれども、他者の独我論的体験は論理的に誤謬となってしまうというすでに述べた理由によって、逆に、エミリー事例の三人称文体を一人称文体に書き換えることにした (読者は、左欄の原テキストをまず通読していただきたい)。

表2の分析をまとめると、次のようになる。「私は私であるという内的体験によって世界が二重化したため、私はエミリーであるという自明性が破れ、なぜ私は他の誰かではないのかという別タイプの自我体験の問いが生じ³⁾、その答えが、エミリーの類例なき特別さに求められた。類例なき特別さと類的存在を二重に生きる化身教義がここに形成され、エミリーは自分が神であることを自覚した。それによって世界の二重化は解消した」。これが、現象学的に解明された事例エミリーである。これをさらに要約すると、「事例エミリーとは、内面的な自己同一性の確立による世界の二重化によって自己の個別的同一性の自明さが破られる

という事態 (=自我体験) を、類的存在としての自己の自明性を破ること (=独我論的体験) によって解消する企てであった」、ということになる。

事例エミリーと木村の自明性概念の比較

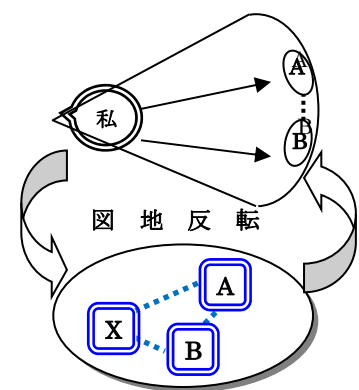
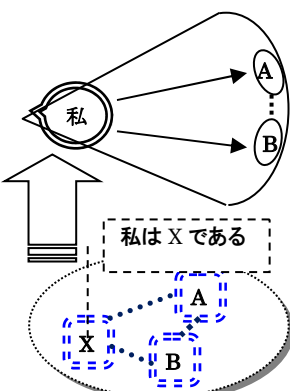
ここで、木村が自明性を論じるにあたって考察した「前章の症例の患者」の例と、現象学的に解明された事例エミリーを比較してみよう。すると、重要な差異が浮かび上がってくる。

木村の自明性の議論は、最初の2つをまとめた自己の個別的同一性の原理と、世界の単一性の原理に分けられるであろう。ところが、木村の「前章の症例の患者」でテーマになっていた、「私がOさんになって」「私って私でないんでしょう」といった前者の原理への侵犯は、エミリーには見られないことに気づく。むしろエミリーが「自分は確かに自分だ」と気づくことは、自己の同一性の確立を意味しているのである (高石 (2004a)、西村 (1978, 2004) ら臨床家は、自我体験はアイデンティティの確立に働くとして述べているが、その限り正しい指摘だろう)。それに伴って新たに内面的に成立した「私=私」を中心とする世界と、「エミリー=エミリー」の日常的客観的世界の間の矛盾が、「私=エミリー」の自明性への疑問という形で、自己同一性の破れを呈するのである (これを他の事例で補足すると、序論の事例1 (p.117) でも、「私は私だ」の自覚が出現することで、「私はAだ」という自明性が破れ、「なぜ私はAであって他の誰かではないのか」という問いが出現している、と分析できる)。

他方、世界の単一性の原理についてはどうか。木村の症例では「世界の単一性がどうであれ、……そこへ置き入れられるべき自己の単一性が成立していない」のだから、この原理の破れは「主」ではなく「従」とみなされている。これに対して事例エミリーでは、「私=エミリー」世界が、「私=私」世界と「エミリー=エミリー」世界へと分裂・二重化することで、個別的自己同一性の自明さも破れるのである。後半の独我論的体験にいたっては、世界の単一性回復の運動である。

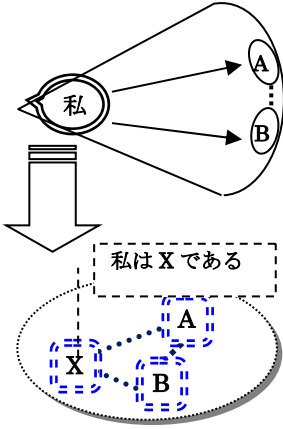
すなわち木村の症例では、私=私の原理の喪失がテーマであるのに対し、事例エミリーでは、世界の単一

表 3 独我論的体験事例と病理的体験事例の現象学的分析

<p>独我論的体験研究誘発例 (理学部 2 年生男子) 余白がだいぶあるので、昔思ったことのあることですが、多分心理学的な事だと思うので書かせて下さい。いつだったかは忘れましたが、本当に人が存在するのかという事です。自分は認識できるので存在はしているのですが、他人は外見しか見る事ができないのだから、自分と同じようなのか中身は空なのかわからなくなったのです。結局出した仮定は、自分以外の物事は全て自分のために存在しているのではないかというものでした。周りの人には自分勝手に自己中心的な考えだと言われましたが、人がいて自分がいるという考え方は、常識ですが誰も絶対に知ることはできないで納得してしまっている事です。今の自分も結局「納得」してしまっている訳ですが……というより、どんな答えをもってしても「理解」する事はできないので、「納得」するしかしかなかったのです。ひさしぶりに思い出したので書いてみましたが、あまりうまく書けなかったようです。(渡辺・金沢, 2005)。</p>	<p>図の上半分は独我論的世界。唯一の、心ある「私」が、心なき(一重円で示す)他者たちを一方的に眺めている。報告者にとっての「理解できる」世界である。図の下半分は常識的・日常性の世界で、「理解できないが納得している」世界である。「理解できる世界」と「納得している世界」とは、ルビンの反転図形における杯と人の横顔のように、図と地の関係にあると思われる。</p>  <p>理解できる世界に生きる時は納得している世界は消え、逆も真である。両方を同時に生きることがないゆえに両者を直接比較できず、それゆえ、「なぜ私は X であって A や B ではないのか」という自我体験の問いが起こらないのかもかもしれない。</p>
<p>統合失調症事例 ある若い患者は、しばしば、現在視野の中にある対象だけが実在であり、その外にある世界は、自分の最も親しい人々や場所も含めて、現実には存在していない気がする」と報告する。自殺企図について質問された時にも、彼はこう答えた：「いえ、僕はけっして自分を抹殺することができないのです。なぜなら、自分によって表象されていない世界というものが、想像できないから。(Parnas & Sas, 2001)</p>	<p>図の上半分は独我論的世界。図下半分の常識的・日常性の世界(すでに点線化=消失している)がそのまま変貌したと考えられる。</p> 

性の原理の破れ (=世界の二重化) がテーマであって、私=私の原理は根本的には自覚がかえって確立している。ここに、両者の体験構造上の違いがある。

表 3 続き

<p>自閉症スペクトラム事例 私が自分とみんなの違いを気にするようになったのは、グニラ〔引用者註：報告者が翻訳した自伝の原著者〕より遅れて、八歳のころでした。自分が人と違うことは最初から知っていましたが、「自分はみんなと同じでなければならないらしいと知った」のがこのときだったのです。私はそれまで、他の子どもたちと自分とが同じカテゴリーに属するなんて、思ってもみませんでした。なぜなら他の子どもたちには背中があるからです。自分の背中は見られないのに、他の子どもたちの背中は見えるからです。／グニラが「向こう側」「内部」を発見したのと同じ八歳のとき、私は自分の「裏側」、つまり背中を発見したのでした。(ニキ, 2000)</p>	<p>この事例報告者は未だに独我論的世界に生きている。とはいえ、常識的・日常性の世界も生成途上と見られるので、これを図の下半分に点線化して示した。</p> 
--	--

独我論的体験と統合失調症およびアスペルガー障害事例の比較

事例エミリーの後半で出現する独我論的体験は、しかし、「主観性を備えた他者の否定」「私が他者と共にある実在的な世界の否定」といった、「哲学説としての独我論直輸入の」(渡辺, 2008, p.149) ものとは、ややタイプを異にするといわなければならない。そこで、より哲学説としての独我論に近い事例を取り上げ、病理的体験と比較することにする。

表 3 で取り上げるのは、渡辺によって、解釈学的循環の中で「循環の出発点であると共に、絶えず研究がそこに立ち戻ってゆくべき『先行理解 (pre-understanding)』の源泉の位置」を占めるとされた、「独我論的体験研究誘発例」(p.145) である。次に、統合失調症事例としては、木村は独我論的体験としてふさわしい事例を紹介していないので、関心相関的に Solipsism をキーワードとして検索した文献であってしかも現象学的精神医学文献の中から事例をあげる。さらに、最近、山本 (2007) によって自閉症者の他者経験が現象学的に考察されているところから、自閉症スペクトラム中のアスペルガー障害に属すると思われ

る作者 (ニキ, 2000) の自伝的記述を取り上げる。以上、病理的事例選択の基準は、その病理一般ではなく、病理体験の中でも独我論的体験の基準に合致することであることを、断っておきたい。前表同様、表 3 でも左欄にテキストを置くが、スペースの関係で中欄を略して右欄に構造図解法の結果を描き出す。

世界の二重化というテーマと次節以降への展望

以上、構造図解法を「本質観取」として用いた質的心理学としての現象学的分析により、自我体験・独我論的体験の本質的な構造的特徴として、世界の二重化というテーマが取りだされた。木村の統合失調症事例では、私=私の自己同一性が失われるのに対し、自我体験では自己同一性が確立するがゆえにかえって世界の単一性が失われるのである。また、表 3 での、独我論的体験と、統合失調症およびアスペルガー障害に出現している病理的体験としての独我論との比較では、前者では世界の二重性を図地反転図形のように可逆性をもってある程度随意に生きることができるのに対し、病理的体験では、世界が随意性を超えて独我論世界化している (もしくは独我論的世界であった)、という点に違いが求められた。

本稿の残りでは、この結果を踏まえて、2つの課題への接近を試みる。第1は、自我体験・独我論的体験への発達論的アプローチの可能性である。第2は、それをさらに踏まえ、フッサール現象学との関わりを改めて考察し、発達のエポケーというアイデアを提起することである。

V レンプとプロトンの発達モデル

世界の二重性というアイデアに基づいて、統合失調症、自閉症、そして「健常者」としての体験世界の発達モデルを提起したのが、レンプ (Rempp, 2005/1992) であった。それによると、発達の過程で人間は2つの現実を生きる。子どもの世界は自己中心的であるが、思春期に至って他者と共感しえる客観的世界へと移行する。前者の世界を隣接現実 (Nebenrealität), 後者の世界を主現実 (Hauptrealität) と呼ぶ。レンプは統合失調症を、いったん主現実に到達しながらも、何らかの原因で隣接現実へと退行を余儀なくされた状態であるとした。また、自閉症は、様々な認知的障害のため生涯にわたって隣接現実の中で成長する状態と見なした。

こうしてみるとレンプは、自己中心的という意味で主観的な世界から客観的世界への移行を、「正常」な発達と見なしているようである。表3でいえば、最下段の自閉症スペクトラムの項で図示した「↓」のような発達を、イメージしていると思われる。事実、彼は、精神病理に関する議論の途中で、自我体験に当たる体験について以下のように述べている。

自己中心的な段階から脱する歩みは、おおくの大人がまだこれを思い出すことができる発達の一歩である。およそ三、四歳の子どものが、なぜ彼自身がまさにこの子どもとして、あるきまった家族のあるきまった名前をもち、あるきまった状況でこの世界にいるのか、なぜ「ぼく」はほんとうに「ぼく」なのかと考えるとき、この子どもはプロトレマイオスの天動説的世界観から自分の人格をおおくの他のひとたちのもとのひとりとして発見するコペルニクスの世界観への歩みをなしとげて

いる (p.137)。

けれども、プロトレマイオスの主観世界からコペルニクスの客観世界へ移行しただけでは、一つの自明な世界からもう一つの自明な世界へ移動しただけである。事例エミリーの分析で示されたように、自我体験が生じるためには、今まで自明だった世界が二重化し、自己が分裂することが前提となる。いったん成立した客観的世界の中で、ある意味で主観的世界が再発見されることが必要なのである(「ある意味で」と留保をつけるのは、その中で「私は私だ」と自覚できるような内的経験世界と、客観的世界獲得以前の自己中心的世界とは、同じく非客観的という意味で主観的といっても、内容が異なるからである)。むしろ、「隣接現実」が発達の過程で分裂し、分裂葛藤の中から一つの選択肢として「主現実」が生み出されると考えられないだろうか。

このような分裂発達という観点で参考になるのが、プロトン (Broughton, 1978) の世界観発達モデルである。プロトンは、ボストン郊外の36名の健常者男女に対して、世界観発展に関する縦断的調査を行った。非構造化面接法の中で、「自分とは何ですか?」「現実とは何ですか?」といった質問がなされた。その結果、(1) 分裂をいまだ知らない幸福な幼年期、(2) 精神と肉体、内面的自己と外面的自己が分裂し、一種の二元論的世界観が形成される思春期から青年期、(3) 二元的なものが統合される後期青年期、という三段階をへて自己理解が発達するという、発達段階説にいたった。プロトン (1981) はまた、実存主義的現象学の精神医学者レイン (Laing, 1971/1960) が「境界例」として挙げる症例「デヴィット」を批判する。「彼 (デヴィット) という存在の前組織は、内的〈自己〉と外的〈パーソナリティ〉との分断の上に成り立っていた」(p.92) と、レインはいう。けれども、プロトンが見出したところによると、思春期の調査対象者は、自己とは何かと問われれば、デヴィットとさほど遠くない(真の自己と外面の自己との区別といった自己分裂的な) 答えを返す傾向があるのである。ここでのプロトンの主張の趣旨は、デヴィットは正常だということではなく、真の自己/にせの自己、といった自己分裂は、「自己概念の正常な発達中の一つ

の通過駅である可能性」(Broughton, 1981, p.24)を、彼の研究が示している、ということである。

以上、レンプ、ブロートンの発達モデルを踏まえれば、自我体験に伴う世界の二重化と自己分裂にも、「正常な発達中の一つの通過駅」としての発達の位置づけが可能になろう。ただし、ブロートンの三段階説は、ヘーゲルの正→反→合の図式を念頭に置いているためか、予定調和的に過ぎる。むしろ最後の統合とは見かけ上のものであって、渡辺(2009, p.143)も指摘するように、妊娠出産や死の告知といった重大なアイデンティティ危機の際には、再分裂することもありうるのではないだろうか。また、思春期に割り当てられている分裂の時期にしても、自我体験調査によれば8~11歳を中心とした児童期後期であるし、個人差が大きい。さらに、どんなに調査方法を洗練させても想起率はせいぜい3人に1人にとどまるどころから、すべての人が自我体験を経験するわけではないらしいという推定がなされる。これらを踏まえて、自我体験の有無や時期の違いによって異なる世界観発展がなされるという、多型分岐発達モデル(p.249)といったアイデアも出されている。

VI 発達性エポケーとフッサール現象学

すでにⅡ節において、自我体験を自然発生的な現象学的還元と見なす可能性が示唆された。締めくくりの本節ではこの構想をさらに推し進め、前節の議論も踏まえて、自我体験・独我論的体験を発達性エポケー(developmental epochè)として捉え直すことにする。

私たちはふだん、たとえば手元にあるサイコロという物が客観的にそれ自体として存在していると無意識のうちに判断している。また自分自身をも、他の多数の「心を持った身体」たちの間の一つの「心を持った身体」として、つまり人間たちの一員として存在していると、無意識のうちに確信している。このような無意識的日常的な態度のことを、フッサール(Husserl, 2001/1977; この段落は、谷, 2004も参照)は自然的態度という。エポケーとは、自然的態度に基づいた無意識的判断を、いったん括弧入れするという、現象学

的還元における手続きのことである。判断中止と訳されることもある。なぜ判断中止をするかと言うと、物や人がそれ自体として客観的に存在するというの意味を、物や人がそれ自体として客観的に存在すると確信しているときの体験の構造を解明することによって、明らかにするためである。判断中止の結果、たとえば机の上のサイコロについての体験現象が、白雪姫を思い浮かべる際の体験現象とは構造的に異なることが分かるゆえに、前者は客観的存在という意味を構成し、後者は架空という別の意味を構成するのである。判断中止は、また、「経験的自我」と「純粹自我」⁴⁾という、重要な区別を明らかにする。経験的自我とは、サイコロのように世界の中の一個の存在として、上記の仕方でも意味として構成される自我である。「純粹自我」とは、そのような意味が構成される場の中心、意味構成作用の主体として想定された自我である。

では、ブランケンブルグ(1978/1971)がアンネ症例に統合失調症性のエポケーを見るのは、どのような意味だろうか。

現象学者にもアンネにも同じように見られるのは、人間から日常のありふれたものの「ありふれた」という性質を奪って、生活の営みから人間を《外へ置く》(ent-setzt) [愕然とさせる] ところの《もつとも自明なものに対する驚愕》である。…《われわれを取り囲んで、事物とのすべてのかわりを根本的に支えているところの自明性が、疑わしいものになる》ということが、見逃すことのできない両者の共通点として浮かび上がってくる。(p.115)

もつとも、両者の間には相違点も多い。そもそも現象学者のエポケーとは、「日常的現存在の自明性からの……確実な方法に導かれ、方法論的にも反省されつくした——離脱以外のなにものでもない」(p.110)。これに対して症例アンネの場合、自明性からの離脱ははるかに強烈で、切迫感があり、しかも、現象学者の場合、随意に自明性を括弧に入れたり外したりできるのに対し、いわば全く強いられているのである(pp.116-119)。

ただし、ブランケンブルグ自身認めているように(pp.115-116)、フッサールにとって括弧入れされねば

ならぬ自明性が、現実性の措定（対象がそれ自体として存在すると無意識に判断すること）にかかわるものであるのに対し、アンネにおいてその喪失が前面に出て問題となっているのは、生活世界における日常性を構成している道具的連関である。自我の問題や間主観性の問題も、アンネの訴えの注意深い現象学的分析によって背景に潜んでいることが明らかにされるに至るが、決して分かりやすくは述べられてはいない。

そこで、次に、フッサールに基づいて病理的エポケーに関して自閉症者の経験を中心に、より明確な視点を打ち出している山本（2007）の議論を参考にする。

山本によれば、他者の心の経験に障害のある自閉症の世界は、フッサールが本格的に間主観性問題に取り組んだ『デカルト的省察』（2001/1977）における、「特別な判断中止」を行って後に残る「私に固有な世界」に比すべきものである。特別な判断中止とは、世界の間主観的な構成を解明するため、「他の主観性に直接的あるいは間接的に関係する志向性のすべての構成能作を捨象する」（p.176）。という操作である。「こうして、この独特の抽象によって他なるものという意味を除去する時、ある種の『世界』が残されることになる。それは、自分固有のものへ還元された自然と、物理的身体によってそれに組み込まれた、精神物理的な自我であり、これらはこの還元された『世界』に見出されるまったく独特なものである。そこには明らかにまた、価値や作品を特徴づける述語のように、純粋にこの自我から意味を得るような述語も現れる」（ibid）。山本はまた、シュッツ（Schutz, 1998/1966）が、「特別な判断中止」を「第二の判断中止」と呼んでいるのを受け、世界がそれ自体として存在するという判断を中止して世界の自明性を疑ってかかるという判断中止を、「第一の判断中止」と呼ぶ（『デカルト的省察』では、第一と第二の判断中止は、名前の通りの順序で行われている）。そして、第二の判断中止が第一のそれよりも根本的であると、症例アンネにおいても、第二の判断中止が強いられてなされた故に第一の判断中止もそれに引きずられてなされたという解釈を打ち出している。また、自閉症と統合失調症の両者を「相互主観性 [= 間主観性] 機能不全」（〔 〕内引用者註）のスペクトラムに位置づけるという、提案を行っている。

以上、レンプ、ブロートンの発達モデル、ブランケンブルグ、山本の精神病理学的なエポケー論を踏まえれば、自我体験・独我論的体験を、発達性エポケーとして捉え直す構想が浮上してくる。ブランケンブルグの患者でもなければ自閉症スペクトラムでもない「定型発達」過程の中でも、私たちは、自然発生的に現象学的エポケーと構造上共通した体験をすることがある。この体験が児童期に多いのは、いまだ自明性の世界が形成途上であり、他の面でも児童期は、認知発達上も自我形成上も変化の多い、不安定な時期だからと考えられる。また、病理的エポケーと発達性エポケーの体験構造上の本質的な相違として、前者では、自明性の世界がそのまま独我論の世界へと変貌したり（統合失調症）、逆に独我論の世界から自明性の世界への変化が未完成だったりして（自閉症スペクトラム）、世界が一重なのに対し、後者では、IV節で見たように、世界の二重性を生きている、という点に求められよう。この体験構造上の違いを体験様式の面で見ると、前者ではエポケーを「強いられている」のに対し、後者では自明性の世界との関係は可逆的で、ある程度は随意に変換可能、という違いとして表現されると考えられる⁹⁾。

図1は、フッサール現象学の全体構図の中に、発達性エポケーを位置づけたものである。左端に置いたのが、23頁の山本の議論に出てくる「私に固有な世界」である。「我思う故に我ありの内的経験世界」とは、フッサール（2001/1977）が繰り返し現象学的還元の出発点はデカルトの「我思う故に我あり」にありと強調しているところから名づけた。「私は私だ」の自覚が、経験的自我の次元でなく純粋自我の次元でなされることで自我分裂がもたらされる世界である⁶⁾。発達性エポケーの構想は、自我体験をこの自我分裂の文脈で解釈することを可能にする。事例エミリーでは、「私=私」が図1でいう「内的経験世界」で成立するがゆえに、「自明性の世界」に属する「エミリー」との間の自明な同一性関係が破れるわけである。また、右端の自然科学的世界は、ガリレイ以来の物理学における世界の数学化によって抽象化された世界である⁷⁾。なお、可逆性という点で、発達性エポケーは、病理的エポケーに比べてむしろ現象学的エポケーに近いことも、指摘しておきたい。そもそも哲学者の現象学的エ

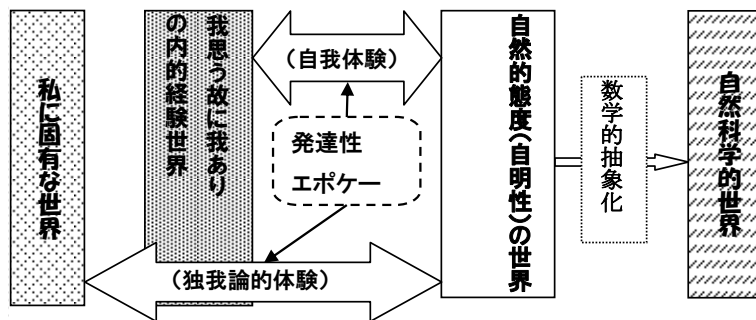


図1 フッサール現象学における「諸世界」の関係と発達性エポケー
白矢印の双方向性がその可逆的性質を示している。

ポケーも、発達性エポケーという体験的な下地があって初めて、可能になるのではないと思われる⁸⁾。

要約すると、本稿では、①自我体験研究を現象学的研究として展開するアウトラインを描くことによって、②病理的エポケーとしての統合失調症や自閉症スペクトラム事例との比較が可能となり、③発達の視点を加えることで、自我体験・独我論的体験を発達性エポケーとして把握するという、新たな理解に到達した。このような成果に照らし、④直接の展望として、自我体験とは「概念というよりイメージに支えられたことば」(高石, 2004b, p.187)と称され、概念上の曖昧さがネックになっていた研究に概念的足場が与えられ、よりのをえた研究が進展することが期待される。⑤また、自我体験研究にとどまらないより一般的な方法論的展望として、ジオルジの方法を踏まえて構造図解法を提案などした本稿での工夫は、難解のイメージのある現象学を、質的心理学の方法として定着させる貢献となることも期待できるだろう。⑥最後に、より遠い展望として、自我体験研究、発達研究一般、現象学の三者の関係について一言しておきたい。発達研究が、間主観的な自明性の世界の成り立ちの説明を目指しても、自然的態度の内部に留まっていたは、自分の髪を掴んで自分を宙に吊り上げる企てになりかねない。フッサールには、自明性の世界を自明なものにしている経験の構造を解明するだけではなく、そのような構造がどのように発生・発達してきたかを問題にする発生的現象学の構想があるが(Husserl, 2001/1977, p.127f; なお, 山口, 2005 参照)、これは、自明性の世界の成

り立ちを、いわば「外から」解明しようという企てとみなすことができる。本稿で新たに発達性エポケーとして定義された自我体験・独我論的体験の研究は、発達研究と発生的現象学をつなぐ手掛かりを与えるものになるかもしれない。

注

- 1) 事例1を上記の論文集にある「自我体験の判定基準」(小松, 2004, p.168)に照らしても(抜粋はⅢ節の表1参照)、「基準①」「基準②」の2基準に当てはまり、「基準①および、②, ③, ⑤のうち一つ以上の基準を満たしていること」という条件に合致し、自我体験と判定できる。
- 2) フッサール(2001/1977)の次の語句——「これまでの意味での学問、客観的な学問に対してまったく対立するような学問」「言わば絶対に主観的な学問」(pp.63-64)。また、最近の経験的現象学研究の中では、たとえば佐久川(2009, p.11)参照。
- 3) 表中でもふれたが、「なぜ私は他の誰かではないのか」という問いは、哲学では意識の超難問と呼ばれ、その有意味性が議論されている(三浦, 2002, 参照)。もちろん本稿では、有意味性の問題は括弧に入れて、「現象」として扱うのである。
- 4) 「超越論的自我」「現象学的自我」とも言われるが、心理学へのなじみややすさの観点から、経験的研究にとっても示唆的な分析が最も豊かに展開されている『イデーニⅡ』(Husserl, 2001/1952)で専ら用いられている、純粹自我の語を採用した。
- 5) 可逆的性質を備えた発達性エポケーのアイデアの萌芽は、すでにブランケンブルグ(1978/1971)の次の

言葉にも見られるところである。「人間には、もともと自明性と非自明性のあいだの弁証法的な運動がそなわっているのです」(p.2)。ちなみに“developmental epoche”の語は、Watanabe (2011) が初出である。

- 6) 純粋自我の自覚が経験的自我との間の自我分裂をもたらすことについて、フッサール (2001/1977) の次の引用を参照のこと ([] 内は引用者註)。「これ [エポケー] によって私は自分を自我として、しかも自分の純粋な意識の生をもった自我として純粋に捉えることになる」(p.49)。「我あり、我思う」と言っても、それはもはや、「この人間としての我がある」ということを意味してはいない」(p.56)。「この素朴に関心をもっている自我 [= 経験的自我] の上に、現象学的自我が……立てられることによって、一種の自我分裂が行われる、……このことが生じること自体は、新たな反省によって近づくことができるが、……」(p.72)。
- 7) フッサール (1974/1954) 最晩年の講演による。本稿の文脈を越えるが、「自明性の世界」が自然科学的世界とは異なる (つまり自然科学的世界像は決して自明な世界ではない) ことに注意を喚起するために書き加えた。
- 8) 哲学者の自我体験という未開拓な研究領域については、ここで触れる余裕がない。現象学的哲学者の体験例として、西 (2002) が、小学校国語教科書に書いている、自身の独我論的体験回想を挙げておこう。

引用文献

- 天谷祐子. (2002). 「私」への「なぜ」という問いについて——面接法による自我体験の報告から. 発達心理学研究, 13, 221-231.
- 天谷祐子. (2004). 質問紙調査による「私」への「なぜ」という問い——自我体験の検討. 発達心理学研究, 15, 356-365.
- ビンスワンガー, L. (1960-1961). 精神分裂病 1・2 (新海安彦・宮本忠雄・木村敏, 訳). 東京: みすず書房. (Binswanger, L. (1957). *Schizophrenie*. Neske: Pfullingen.)
- ブランケンブルク, V. W. (1978). 自明性の喪失 (木村敏・岡本進・島弘嗣, 訳). 東京: みすず書房. (Blankenburg, V. W. (1971). *Der Verlust der Natürlichen Selbstverständlichkeit: Ein Beitrag zur Psychopathologie Symptomarer Schizophrenien*. Stuttgart: Ferdinand Enke Verlag.)
- Broughton, J. M. (1978). Development of concepts of self,

- mind, reality and knowledge. *New Directions for Child Development, 1*, 75-100.
- Broughton, J. M. (1981). The divided self in adolescence. *Human Development, 24*, 13-32.
- ビューラー, C. (1969). 青年の精神生活 (原田茂, 訳). 東京: 協同出版. (Bühler, C. (1926). *Das Seelenleben der Jugendlichen, 3 Aufl.* Stuttgart-Hohenheim: Fisher Verlag.)
- フロム, E. (1956). 自由からの逃走 (日高六郎, 訳). 大阪: 創元社. (Fromm, E. (1941). *Escape from freedom*. NY: Rhinehart & Company.)
- Giorgi, A. (2009). *Descriptive phenomenological method in psychology: Husserlian approaches*. New York: Duckesque University Press.
- ヒューズ, R. (2003). ジャマイカの烈風 (小野寺健, 訳). 東京: 晶文社. (Hughes, R. (1929/1992). *A high wind in Jamaica*. London: Chatto & Windus Vintage, Random House.)
- フッサール, E. (2001). イデーンⅡ - I —— 純粋現象学と現象学的哲学のための諸構想 (立松孝孝・別所良美, 訳). 東京: みすず書房. (Husserl, E. (1952). *Ideen zu einer Reinen Phänomenologie und Phänomenologischen Untersuchungen zur Konstitution*. Hague, Netherlands: Martinus Nijhoff.)
- フッサール, E. (1974). ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学 (細谷恒夫・木田元, 訳). 東京: 中央公論社. (Husserl, E. (1954). *Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendente Phänomenologie*. Husserlinana Bd. VI. Hague, Netherlands: Martinus Nijhoff.)
- フッサール, E. (2001). デカルト的省察 (浜渦辰二, 訳). 東京: 岩波書店 (岩波文庫). (Husserl, E. (1977). *Cartesianische Meditationen: Eine Einleitung in die Phänomenologie*. Herausgegeben, eingeleitet und mit Registern versehen von Stoeker, E., Feliz Meiner.)
- 木村敏. (1973). 異常の構造. 東京: 講談社 (講談社現代新書).
- Kimura, B. (1997). Cogito et je. *L'Evolution Psychiatrique, 62* (2), 335-348.
- 小松栄一. (2004). 自我体験——沈思のディスコース. 渡辺恒夫・高石恭子 (編), 〈私〉という謎——自我体験の心理学 (pp.165-184). 東京: 新曜社.
- 鯨岡峻. (2005). エピソード記述の方法. 東京: 東京大学出版会.
- レイン, R. D. (1971). 引き裂かれた自己 (阪本健二・志貴春彦・笠原嘉, 訳). 東京: みすず書房. (Laing, R. D. (1960). *The divided self: An existential study in*

- sanity and madness*. London: Tavistock.)
- 三浦俊彦. (2002). 意識の超難問の論理分析. 科学哲学, 35 (2), 69-81.
- ニキ・リンコ. (2000). 訳者あとがき. グニラ・ガーランド, ずっと「普通」になりたかった (pp.281-286). 東京: 花風社.
- 西研. (2002). ぼくの世界, きみの世界. 小学国語教科書 (六年上) ひろがる言葉 平成 14 年版 (pp.46-52). 東京: 教育出版.
- 西村州衛男. (1978). 思春期の心理 3——自我体験の考察. 中井久夫・山中康裕 (編), 思春期の精神病理と治療 (pp.255-285). 東京: 岩崎学術出版社.
- 西村州衛男. (2004). 自我体験とは. 渡辺恒夫・高石恭子 (編), 〈私〉という謎——自我体験の心理学 (pp.17-42). 東京: 新曜社.
- Parnas, J., & Sas, L. A. (2001). Self, solipsism, and schizophrenic delusions. *Philosophy, Psychology and Psychiatry*, 8 (2-3), 101-120.
- レンプ, R. (2005). 自分自身をみる能力の喪失について——統合失調症と自閉症の発達心理学による説明 (高梨愛子・山本晃, 訳). 東京: 星和書店.
- (Rempp, R. (1992). *Vom Verlust der Fähigkeit, sich selbst zu betrachten: Eine entwicklungspsychologische Erklärung der Schizophrenie und des Autismus*. Bern: Verlag Hans Huber.)
- 西條剛史. (2005). 質的研究論文執筆の一般技法——関心相関的構成法. 質的心理学研究, 4, 186-200.
- 佐久川肇 (編). (2009). 質的研究のための現象学入門——対人支援への「意味」をわかりたい人へ. 東京: 医学書院.
- サルトル, J. P. (1952). ボードレール (白井浩司, 訳). 京都: 人文書院. (Sartre, J. P. (1947). *Baudelaire*. Paris: Gallimard.)
- シュッツ, A. (1998). アルフレッド・シュッツ著作集第4巻——現象学的哲学の研究 (渡部光・那須壽・西原和久, 訳). 東京: マルジュ社. (Schutz, A. (1966). *Collected Papers 3: Studies in Phenomenological Philosophy*. Hague: Martinus Nijhoff Publishers)
- Spiegelberg, H. (1964). On the 'I-am-me' experience in childhood and adolescence. *Review of Existential Psychology and Psychiatry*, 4, 3-21.
- シュピーゲルベルグ, H. (1993). 精神医学・心理学と現象学 (西村良二・土岐真司, 訳). 東京: 金剛出版.
- (Spiegelberg, H. (1972). *Phenomenology in psychology and psychiatry*. Boston: Martinus Nijhoff Publishers.)
- Spiegelberg, H. (1975). *Doing phenomenology: Essays on and in phenomenology*. Hague: Martinus Nijhoff Publishers.
- Spiegelberg, H. (1986). *Steppingstones toward an ethics for fellow existers: Essays 1944-1983*. Dordrecht / Boston: Martinus Nijhoff Publishers.
- 高井弘哉. (2004). 発達心理学から見た自我体験. 渡辺恒夫・高石恭子 (編), 〈私〉という謎——自我体験の心理学 (pp.195-213). 東京: 新曜社.
- 高石恭子. (2003). 青年後期から若い成人期に想起された自我体験の考察——大学生への調査を基に. 甲南大学学生相談室紀要, 11, 23-34.
- 高石恭子. (2004a). 子どもが〈私〉と出会うとき. 渡辺恒夫・高石恭子 (編), 〈私〉という謎——自我体験の心理学 (pp.43-72). 東京: 新曜社.
- 高石恭子. (2004b). 指定討論 1. 渡辺恒夫・高石恭子 (編), 〈私〉という謎——自我体験の心理学 (pp.185-190). 東京: 新曜社.
- 谷徹. (2004). 記者解説. フッサール, プリタニカ草稿 (pp.171-279). 東京: 筑摩書房 (ちくま学芸文庫).
- 渡辺恒夫. (2004). プロローグ——スフィンクスの謎から〈自我の発見〉の再発見. 渡辺恒夫・高石恭子 (編), 〈私〉という謎——自我体験の心理学 (pp.1-13). 東京: 新曜社.
- 渡辺恒夫. (2008). 独我論の体験とは何か——自発的事例に基づく自我体験との統合的理解. 質的心理学研究, 7, 138-156.
- 渡辺恒夫. (2009). 自我体験と独我論の体験. 京都: 北大路書房.
- Watanabe, T. (2011). From Spiegelberg's "I-am-me" experience to the solipsistic experience: Towards a phenomenological understanding. *Encyclopaedia - Journal of Phenomenology and Education*, XV (29), 91-114.
- 渡辺恒夫・金沢創. (2005). 想起された〈独我論的な体験とファンタジー〉の3次元構造——独我論の心理学研究へ向けて. 質的心理学研究, 4, 115-135.
- 渡辺恒夫・小松栄一. (1999). 自我体験——自己意識発達研究の新たな地帯. 発達心理学研究, 10, 11-22.
- 渡辺恒夫・高石恭子 (編). (2004). 〈私〉という謎——自我体験の心理学. 東京: 新曜社.
- 山口二郎. (2005). 存在から生成へ. 東京: 新泉社.
- 山本晃. (2007). 二種類の他者——自閉症児における他者経験の発達. 臨床精神病理学, 28, 233-256.

謝 辞

シュピーゲルベルグ論文の存在を教えて下さった A. ジョルジ教授および、ジョルジ教授と知り合う機会を作っていただいた吉田章宏教授に感謝します。

(2010.10.19 受稿, 2011.4.22 受理)